

# 学都屋台食談

第3回

玉田工業株式会社  
代表取締役社長

玉田 善久氏

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、講師と学生が語り合う「学都屋台食談」を11月15日から11月25日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催しました。2006年から今年で14年目を迎えた食談で、講師の方々が語ったメッセージを紹介します。

 TAMADA

**会社が存在できるのは  
誰かに必要とされるから**

玉田工業はガソリンなどの貯蔵用に埋設される地下タンクを製造し、国内ナンバーワンのシェアを誇っています。来年で創業70周年を迎える会社の歴史の中でも特筆すべきなのが、2011年の東日本大震災に端を発する仕事です。これまで培ってきた技術力を生かし、福島第一原子力発電所で発生した汚染水を貯めておくためのタンクを納めたのです。この仕事をやり遂げるため、当社では同年5月から3カ月間、全国の拠点に散らばっている社員を栃木県内の工場に集め、昼夜2交代制で休日も返上して、タンクの製造を続けました。私を含め、普段は製造に関わらない営業や事務のスタッフも参加する総力戦でした。

被災地の様子を伝えるニュースを見て、誰もが自分たちにできることがあれば力になりたいという気持ちを持っていましたから、社員のモチベーションは非常に高く、通常であれば半年ほどかけて製造する数のタンクをその半分ほどの期間で完成させることができました。会社は誰かに必要とされるから存在できるし、必要とされる度合いが強いほど、存在意義もあるということをあらためて感じました。

**利他の精神で  
よりよい仕事を**

当社は私の祖父が立ち上げ、父の代で全国展開を果たしました。小さい頃から祖父の膝の上で、「大きくなったら跡を継ぐんやぞ」と言われて育ちましたが、父から「20代は好きなことをやればいい」と言われていましたので、車好きだった私は大学卒業後、自動車部品メーカーに勤務しました。

入社2年目から約4年間、アイルランドとルーマニアで勤務し、生産拠点の立ち上げなど、貴重な経験を積むことができました。その間、結婚して石川から妻を呼び寄せたり、現地で娘が生まれたりと人生の節目となる出来事もありました。

当初は英語も話せず、大変な思いもしま

## 人のために頑張れば、いつも以上の力が出る



参加生

前左から、山口真太郎さん(金沢大学修士1年)、松榮勇志さん(金沢星稜大学3年)、後列左から、長森有紀さん(金沢工業大学3年)、伏木真子さん(金城大学4年)、林和雄さん(金沢美術工芸大学2年)

企画/㈱アドマック 編集/㈱都市環境マネジメント研究所

したが、それでも頑張ることができたのは、妻と娘の存在が大きかったと思います。先ほどの汚染水タンクの話と同様で、人は自分のためではなく、誰かのために行動すると、思ってもみない大きな力を発揮したり、継続したりすることができるようになります。

言い換えれば、自分の利益ではなく、周囲の人々や世の中のことを優先して考える利他の精神を心がけることで、人生が豊かになり、よりよい仕事につながっていくのだろうと思います。

**困難なことも  
前向きに捉えられる感性を**

私が玉田工業に入社してから14年がたち、今年6月には社長に就任しました。これまでと違い、会社の方針など重要事項の決定はすべて私が下すこととなります。仮にその決断が間違いで失敗を招いたとすれば、その責任を負うのも私です。

参加学生の皆さんは、大変な仕事と思うかもしれませんが、同じ事態に直面しても、どう捉えるかはその人の感性や考え次第です。社長の仕事であれば、責任も大きいですが、誰に何を言われたとしても、最終的には何でも自分で決められる楽しさもあるのです。

そんなふうには物事にはすべて表と裏があります。どんな困難や苦勞に直面したとしても、有益な側面に目を向けて前向きに取り組めば、その経験は自分の人生にとって、きつとプラスになるはずですよ。



講師

玉田工業株式会社  
代表取締役社長

玉田 善久氏

たまだ・よしひさ

1976年、石川県金沢市出身。金沢工業大学経営工学科卒業後、タカタを経て2005年に玉田工業に入社。取締役営業本部長、常務、タマダベトナム社長、専務を経て、19年6月に代表取締役社長に就任。